

グローバル循環プロトコルの概要と国際ルール形成

2026年2月

吉田 諭史

環境省

循環経済に関する国際ルール形成に関する背景

■ 国際ルール形成は緒についたばかり

循環経済の取組及び開示は、製品・サービスの競争力、企業価値・資金調達力等に直結するものの、TCFDやTNFDのように**国際的な枠組みは未確立**。循環性評価を含めたルール整備が未成熟で**共通言語が欠如**。

■ EUによる循環経済関係規制の乱立

一方、EUは企業レベルの資源循環に関する**情報開示を義務化**。また、特定の循環性指標に適合しない場合、**EU市場でのビジネスが困難となるバッテリー、プラスチック等製品規制が次々に成立**。これらの規制により、日本企業のEU市場における競争力上の問題だけでなく、**経済安全保障及びEU市場外での国際競争力にも悪影響を及ぼす可能性**。

国際的なルール・定義の不在

脱炭素

TCFDによる企業情報開示スキームが確立
GHGプロトコルにより排出量算定方法が確立

自然共生

TNFDによる企業情報開示スキームが進行

資源循環

CTI、ISO、CSRD等があるが、開示・指標ともに未成熟

CTI - WBCSD（持続可能な開発世界経済人会議）が開発した循環性指標(Circular Transition Indicators)

ISO59020 - 企業の循環性の測定・評価の国際標準規格

CSRD - EUによる企業の持続可能性報告指令（報告義務）

環境省の取組

- G7での循環経済及び資源効率性原則(CEREP)の策定をリード
- WBCSDとGCP（グローバル循環プロトコル）の開発連携
- 国内で企業等と情報開示や循環性指標等を開発



連携



BRIDGE事業において検討会を立上げ（2024年～）

策定
主導



G7広島サミットにて
CEREP採択
（2023年）

連携



WBCSDとGCP開発
で連携
（2024年～）

環境省は日本企業・WBCSDとGCP開発で連携し**国際ルール形成を主導**。規制＝トップダウンではなく**ビジネス主導**によるルール作り。

- GCPは、「**組織の循環性パフォーマンスとインパクトを測定し、管理し、コミュニケーションするための最初のグローバルかつ相互運用可能なフレームワーク**」(本文引用)。
- 気候変動に例を使い単純化すると、GHGプロトコル、Avoided Emissions、TCFDの要素が一つになったビジネス向けの循環経済評価・管理・開示ガイダンス。

GCP User Journey

評価

開示

GHG
プロトコル

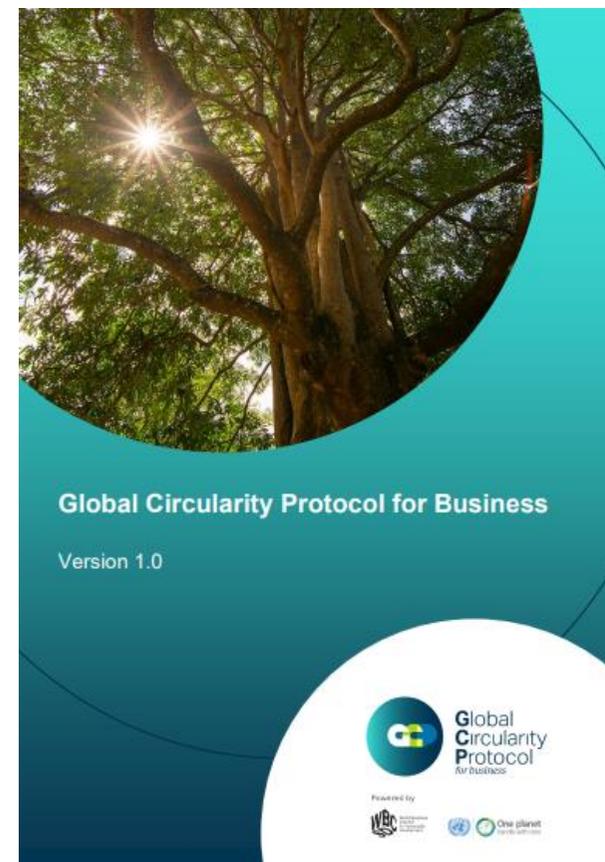
Avoided
Emissions

TCFD

循環性指標
スコープ (A~D)

スコープD
Avoided Resources

情報開示
IFRS/S1のリンクージ

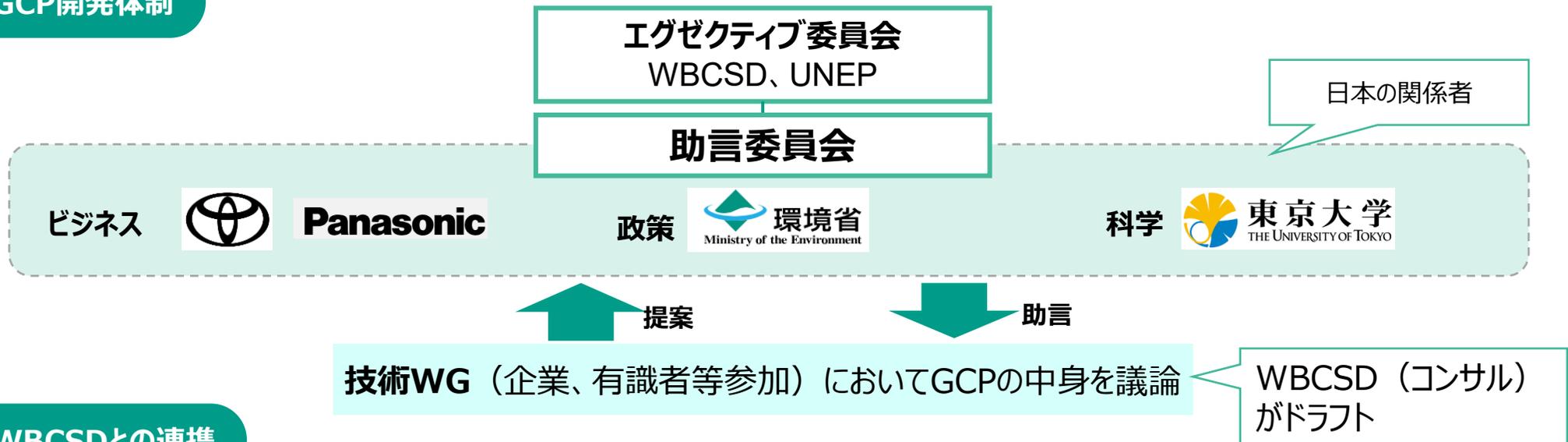


出典：GCP1.0 (WBCSD 2025)

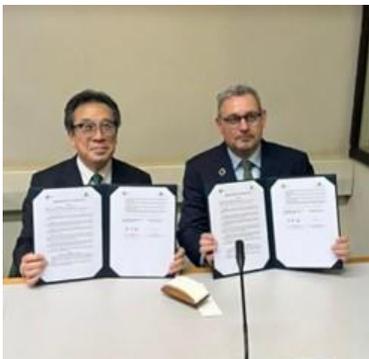
グローバル循環プロトコル（GCP）の開発体制・WBCSDとの連携

- GCPの開発には、WBCSDのグローバル企業を中心に80以上の組織が参加。WBCSD主導で作成した内容を、日本の企業や有識者も参加する技術WGにて議論。
- また、一部の日本企業、環境省等が助言委員会に参画し、開発に貢献。
- GCP1.0をCOP30（2025年11月）に公表。公表後も継続的な改善や新規開発を予定。

GCP開発体制



WBCSDとの連携



協力覚書の署名

環境省とWBCSDのGCPの開発の協力文書の締結（2024.2）

（協力内容）

- ✓ 循環性に関する企業パフォーマンス・アカウンタビリティシステム(CPAS)を含むGCPの開発
- ✓ 試行やフィードバックに参加する日本企業の動員
- ✓ 環境省の関連委員会への参画
- ✓ 国際的なイベントの共催
- ✓ CEREPとGCP間の相乗効果と補完的役割の強化及び両イニシアチブの推進

(参考) GCP1.0の開発の参加者

- GCP1.0の開発には、日本企業からはトヨタ、ホンダ、パナソニック、ダイキン、富士通、ブリジストン、花王、野村総研、日立が参画。その他、大学、シンクタンクや研究機関の有識者も参加。
- また、グローバルではISO、国連機関、開発銀行、NGO等幅広い機関も参加している。



GCPローンチ@COP30

ビジネスのためのグローバル循環プロトコルの公開 -気候、自然、公正への影響-



概要

- 日時：11月11日（火）13:45～15:15（日本時間 11月12日（水）1:45～3:15）
- 司会：吉田 諭史 環境省国際資源循環調整官
- 開催：環境省（主催）、WBCSD/UNEP One Planet Network（共催）

1. 開会挨拶	ダイアン ホルドルフ WBCSD エグゼクティブリーダーシップチーム エグゼクティブヴァイスプレジデント
2. 基調講演	アダルベルト マルフ ブラジル連邦共和国環境気候変動省 イルハム カドリ WBCSD 議長 Syensqo CEO 土居 健太郎 環境省 地球環境審議官
3. プレゼンテーション	クエンティン ドリュエル WBCSD サーキュラープロダクト&マテリアルズ シニアディレクター
4. パネルディスカッション	石井 菜穂子 東京大学未来ビジョン研究センター、グローバル・コモンズ・センター グローバル・コモンズ担当総長特使 アファ フォン レイン オランダ インフラ・水管理省 環境・外務担当副大臣 グラジエレ タリア パレンチ Vale コーポレートサステナビリティ ヴァイスプレジデントオブサステナビリティ カレン プラグ Ingka Group グループサステナビリティ CSO 大塚 友美 トヨタ自動車株式会社 サステナビリティ推進部 統括部長 上原 宏敏 パナソニック オペレーショナルエクセレンス株式会社 品質・環境担当 執行役員 志村 幸美 株式会社三菱UFJ銀行 サステナブルビジネス部企画開発グループ コーポレート・エンゲージメント・ディレクター
5. 閉会挨拶	ホルヘ・ラグナ-セリス One Planet Network ヘッド、OPN

結果

- グローバル循環プロトコル（GCP）1.0を正式公表。GCP1.0の開発にあたっては、**日本を含め、国際的な協力により進められ、今後の改善を含めた発展の出発点。**
- 日本からは、G7CEREPの実施に重要なGCP策定を当初から支援してきた、GCPは国際的な共通基準として**企業の循環経営と投資家対話を促すもの、初版は未成熟で今後の改善が重要**であることを強調。
- 企業からは、GCPに対する国際的に統一された**基準・共通言語としての期待と、ホットスポットの特定や経営戦略・成長戦略を支えるツール**としての期待が述べられた。
- 金融機関からは、**気候変動を含め多面的な要素をまとめて評価できるバランスに価値を見出して**おり、また、専門性を有していない金融側として、解釈と能力構築を支えるフレームワークとしてGCPの必要性が述べられた。
- 政府側からは、GCPは技術的に妥当で実務的に使いやすい枠組みとして普及させることが求められる、今後作成される**政策枠組みも重要**である。

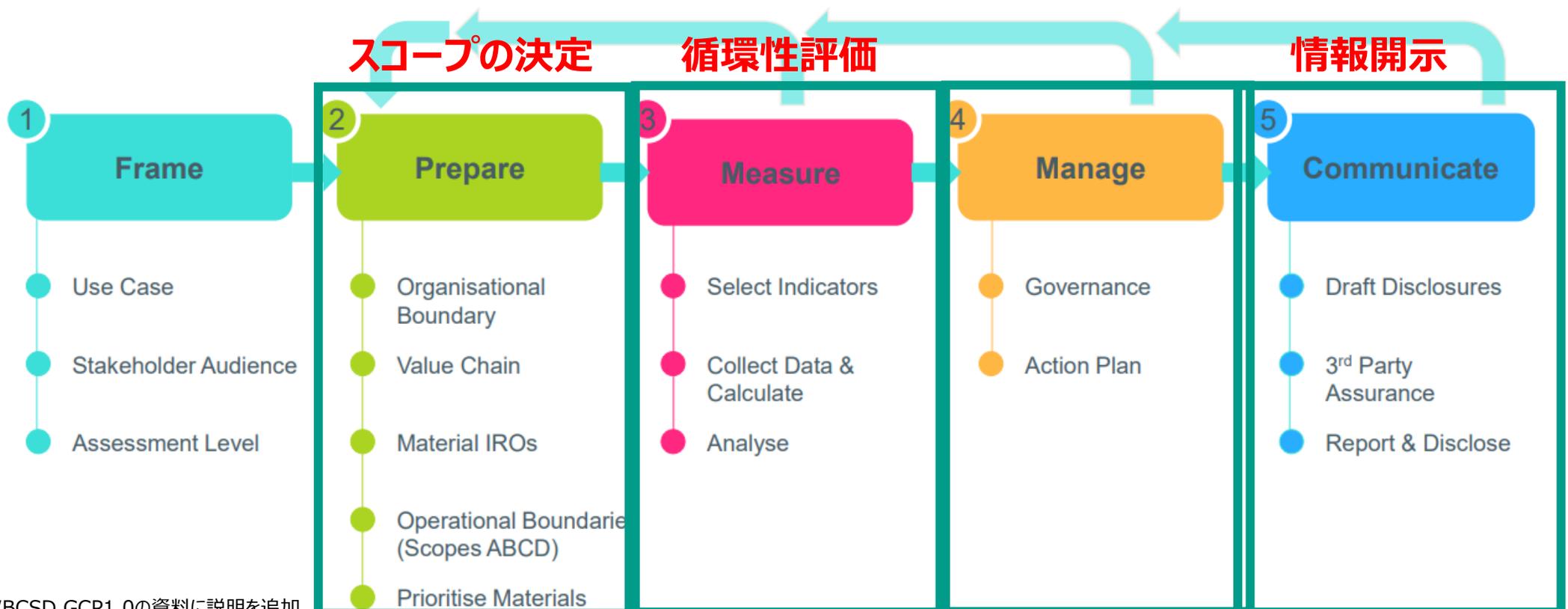


- GCPの骨格は「**GCP User Journey**」。この5つの柱で各企業がPDCAを回し循環性を向上させつつ、投資家等外部とのコミュニケーションを通じ企業価値を上げていく。
- **スコープの決定**はPrepare、**循環性評価**はMeasure、**(経営) 管理**はManage、**情報開示**はCommunicationに規定されている。

The GCP User Journey is an iterative process



Global Circularity Protocol Version 1.0



GCPにおける評価の範囲（バウンダリー）

- 循環性評価の範囲は、GHGプロトコルと一定の整合を図る形で**範囲A～D**が定められた。
- 自社内の範囲A+B、自社外のC+Dに分けられる。**DはAvoided Emissionsの概念に近い**（他バリューチェーンへの貢献）。
- AとBは統合可能であり、また、CとDの境界も不明なため、再整理される可能性あり。

Scopes for operational boundaries	Material flows under direct control		Material flows under indirect control	Contribution to the circular economy through System Impact
	自社内		自社外 (scope in development for)	
Denotation	Scope A	Scope B	Scope C	Scope D
Description	Flows to and from the environmental system	Flows entering in and exiting the organization	Flows across the end-to-end value chain 範囲3に該当	Flows in other parts of the economic system 他バリューチェーン
Relevance of the Value Chain mapping for operational boundaries	Identify activities related to resource extraction and waste management in organization-owned/controlled assets, facilities (e.g., own operations)	Identify value chain activities with direct suppliers and direct clients - focusing on where the organization has significant influence (e.g., through contracts, partnerships, or collaborative initiatives).	Identify value chain activities with indirect suppliers and the broader economic system. Highlight areas where the organization's influence is limited, requiring collaborative efforts with other actors in the end-to-end value chain, to improve material efficiency.	Identify value chain activities associated to the post-use stages of the material lifecycle, to enable identification of contributions to the circular economy through the organization's own product design, take-back programs, or other initiatives aimed at driving circularity across other value chains within the broader economic system.

GCPにおける循環性評価・指標

- 循環性指標は、**マテリアルフロー中心**で、WBCSD作成の**CTI4.0**を踏襲。マテリアルフローの**断面の評価が可能**だが、**部分最適化**を招きやすい。
- バリューチェーン全体（外も含む）を俯瞰した評価が可能な指標（例：AR）や財務影響との関連を考慮した指標は今後開発予定。



ループの区分		ループの説明	関連指標
CEパフォーマンス評価	Close the Loop (ループを閉じる)	<ul style="list-style-type: none"> 調達・設計・ビジネスモデルなどVC全体で、循環資源の流入、回収可能性、実際の回収などのコア指標を用いて評価する。 標準化された定義により部門横断的な連携や意思決定を促進し、循環戦略の全社的な展開を支援する。 	<ul style="list-style-type: none"> サーキュラーインフロー率 サーキュラーアウトフロー率 回収可能性率 実際の回収率 材料循環率
	Narrow and Slow the Loop (ループを狭め、長期利用する)	<ul style="list-style-type: none"> 同じ機能やサービスを提供するために必要な材料量や、製品・部品の寿命延長の度合いを評価する。 絶対的・相対的な資源削減率の指標を用いて、資源使用量や環境負荷の削減効果を測定し、規制対応や投資家への説明責任を強化する。 	<ul style="list-style-type: none"> 絶対的な資源削減率 相対的な資源削減率 実際の製品寿命
価値やインパクト評価	Value the Loop (ループの価値化)	<ul style="list-style-type: none"> 循環戦略によるビジネス価値の創出を評価する。資源効率性や収益などの指標を追跡することで、循環戦略の収益性や資本配分の最適化、全社的な意思決定の高度化を支援する。 	<ul style="list-style-type: none"> 資源効率性 循環型材料による収益
	Impact of the Loop (ループのインパクト)	<ul style="list-style-type: none"> 循環戦略による環境・社会的インパクトを評価する。GHG削減や土地利用、生物多様性、社会的目標との連携を通じて、循環施策の企業価値への貢献を定量化し、優先順位付けや説明責任を強化する。 	<ul style="list-style-type: none"> GHGインパクト ネイチャーインパクト ソーシャルインパクト

- 情報開示の骨格は、**基本IFRSのサステナビリティ開示基準との整合性を確保。企業が決めたバウンダリー（スコープ）に基づき、下記のような開示を推奨。**
- 財務マテリアリティ評価中心に、**IFRS S1への接続は課題あり**（ガイダンスの開発を予定）

Core Disclosure Pillars（骨格となる開示の柱）

戦略

Strategy

- 循環ビジョン、ミッション、目標、ターゲット
- 循環戦略開発プロセス、影響・リスク・機会（IRO）および重要性の統合
- 戦略と価値のリンク

ガバナンス

Governance

- ガバナンス構造とポリシーの概要
- IROへの統合、戦略的監督およびステークホルダーガバナンス
- リスク管理プロセスおよび内部統制 等

インパクト、リスク、機会

Impact Risk Opportunity Management

- 導入されている循環ポリシー
- 循環アクションおよびアクションプランの開発
- IROを特定し、戦略、指標、ターゲットにリンクするプロセス

指標と目標

Metrics and Targets

- 開示目的に基づいた関連指標とパフォーマンスの開示（方法論、検証/確認、定義、測定単位、指標選択の理由、現在のパフォーマンスと解釈）
- 組織が設定したターゲット（説明、タイムフレーム、基準年、エコロジカルスレッシュホールド、方法論、規制要件、進捗状況、ベンチマークとの比較）

(参考) GCP v1.0とIFRS S1との簡易比較

■ IFRS S1が求める財務マテリアリティへのリンケージについては、明確なガイダンスはない（今後策定）

論点	GCPでの開示	IFRS S1で期待される情報（IFRSより）	金融機関の評価観点
開示の目的	循環性の成果・進捗を、比較可能で意思決定に使える形で共有（金融以外のユーザーも）	企業価値に影響するサステナビリティ関連リスク・機会を開示し、資源提供判断に資すること。	「循環の良い話」になっていないか：財務影響への関係性が示されているか。
何を開示するか	4Pillarsに基づき、ガバナンス／戦略／インパクトリスク機会管理／指標・目標を開示	ガバナンス／戦略／リスク管理／指標・目標の4Pillarsで、重要なリスク・機会とパフォーマンスを説明。	GCPの指標・計画がS1の4本柱へ「接続」されているか（ロジックが明確で飛躍がないか）。
範囲（境界）	組織境界＋バリューチェーンを踏まえ、マテリアルフローの運用境界を設定。	バリューチェーンを考慮しつつ、企業価値に影響する範囲をカバー（財務マテリアリティ）。	上流依存（原材料）となっていないか、下流（回収/規制）が抜けていないか。
指標の性格	循環性を測るマテリアルフロー指標が中心（算定→分析→開示）。	指標そのものは一般要求で、企業価値に影響する指標を選び、進捗や影響を説明。	指標が財務ドライバーに紐づく説明があるか。（コスト・供給安定・規制対応コスト等）
開示の質（比較可能性）	開示要素の選択が可能で柔軟性がある。	目的は投資家の意思決定有用性。比較可能・中立・忠実な表現が重要。	同業比較ができる粒度か（定義・範囲・算定が説明されているか）。
データ信頼性	データ品質・ガバナンスに触れるが、保証は任意。	信頼性（faithful representation）が投資意思決定の前提。制度上の保証は法域差。	サプライヤー/廃棄物事業者のデータの妥当性、第三者保証やガバナンスを確認。
将来見通し	ロードマップや行動計画は出しやすい。	企業価値に影響する見通し（短中長期）としてリスク・機会を説明。	計画が資本支出・運転資本・収益性に与える影響（感応度）まで踏み込むか。

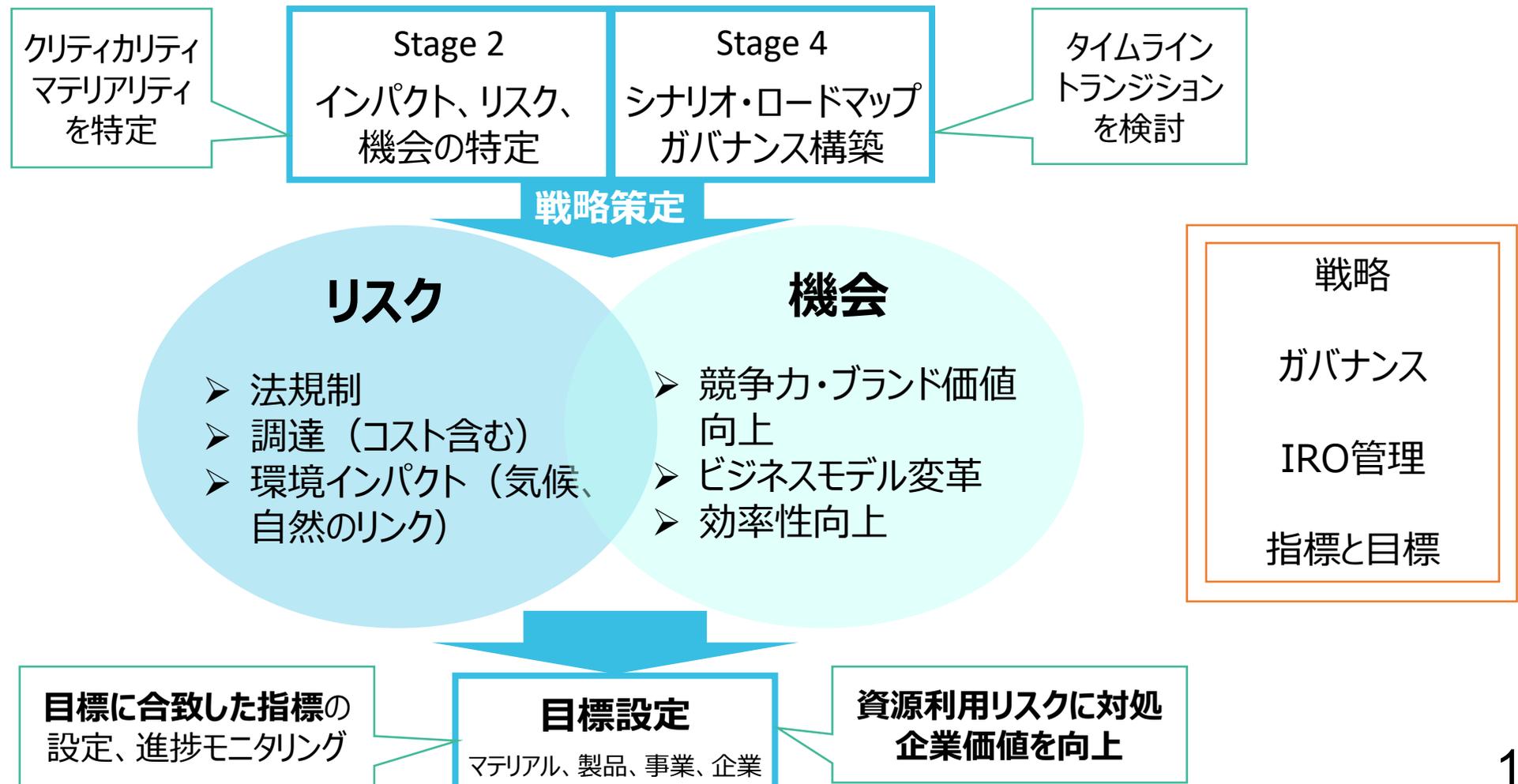
(参考) GCP v1.0とESRS E5 (簡素化案) の簡易比較

■ ESRSの簡素化提案とは一定の整合性があるが、指標や財務影響評価含め追加的な対応が必要

ESRS E5項目	当初案	簡素化提案 (Omnibus)	GCPでの対応	整合性評価
IRO-1 (ESRS2)	詳細なIRO特定プロセスの説明	記述の負荷軽減/既存リスク管理プロセス活用可	Stage2 PrepareでIRO特定	橙：既存の企業リスク管理との連携が鍵
E5-1 方針	詳細ポリシー記載	要点中心の簡潔記述	Stage4 Manageで方針整理	緑：GCPで十分対応
E5-2 行動・資源	詳細な行動計画・投入資源	重要施策に限定、数値詳細は縮減	施策管理は可能	橙：CAPEX粒度は要補完
E5-3 目標	複数指標・説明	主要KPI・期間の明確化等の簡素化	KPI設定・進捗管理	緑：相性が良い
E5-4 資源流入	詳細分類での流入量	重要資源に絞り込み	マテリアルフロー算定	緑：高整合
E5-5 資源流出	製品・廃棄物の詳細	廃棄物区分の簡略化	流出・廃棄量算定はない	赤：廃棄物量の測定が必要
E5-6 財務影響	短中長期の定量影響	定性説明中心へ緩和の可能性	影響評価は任意	赤：財務視点は別途必須
保証・統制	完全保証前提	段階的保証・移行期間拡張	Stage5で支援可能	橙：金融機関はトレーサビリティ確認が必要

凡例：緑=高い整合 橙=部分整合 (簡素化後も補足必要) 赤=ギャップ (簡素化後も追加対応必要)

- GCP1.0では**目標設定**に関するガイダンスは最小限だが、**フレームワークとしてはすでに存在**。循環経済のグローバルな目標をトップダウンで決めて各企業がそれに基づく目標設定をするというアプローチは、マテリアルの多様性や相互リンケージの観点から実現性は不明。
- むしろ、**既存のフレームワークを活用し各社が戦略・シナリオに基づき目標設定**を行い、**事例を積み重ね**、出し側と受け手側がコミュニケーションを取りながら**目標設定のルール形成**を進めるべき。



今後のGCPの開発計画（～2028年）と課題



- GCP1.0は課題も多く、まずは**企業が使い、フィードバックを元に改善するプロセスを確立**すべき。
- 新規開発は、様々な提案があるが、ニーズを踏まえた**プライオリティ付け**が重要。

黒字：改善
青地：新規開発

GCP1.0の改善

- 開発期間が短く、精査や議論が不十分で作成された内容の改善
- 企業の実態との乖離部分の改善

指標開発・改善

- Avoided Resourcesの開発
- 財務関連指標・汚染指標開発
- 国際基準等との齟齬への対処

ガイダンス作成

- IFRS S1の接続ガイダンス
- セクターガイダンス

その他の開発

- 政策枠組み
- SBT（科学的根拠に基づく目標）設定